

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號四第

卷二十三第

行發日一月四年六和昭

## 論叢

地方人税の課税方法 . . . . . 法學博士 神戸 正雄  
 デイルタイ哲學と經濟哲學 . . . . . 經濟學博士 石川 興二  
 數學的經濟學の論理的構造の批判 . . . . . 文學博士 米田庄太郎  
 利子の形成について . . . . . 文學博士 高田 保馬

## 說苑

米の生産と消費の分離 . . . . . 經濟學士 谷口 吉彦  
 農業恐慌 . . . . . 經濟學士 八木芳之助  
 獨逸中工業金融機關とIndustrieschaft . . . . . 經濟學士 楠見 一正

## 雜錄

測るべき大量 . . . . . 經濟學士 蛭川 虎三  
 生計費指數に就て . . . . . 經濟學士 益田 熊雄  
 百姓一揆論に土屋喬雄氏に答ふ . . . . . 經濟學博士 黒 正 巖

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁 轉 載)

# 農業恐慌

八木芳之助

## 一、農業恐慌の意義

世界何れの國に於ても今日は農業不況に苦しみ、世人は此の状態を表現するに農業恐慌なる語を以てしてゐる。恰も經濟學は既に久しき以前に於て、農業恐慌なる概念を明瞭に規定し、農業恐慌理論を精細に體系づけてゐるかの如くに。然るに實狀に於ては、農業恐慌の國民經濟上に及ぼす重大性に拘らず、此の現象は充分組織的に解説されてゐない。一般恐慌理論、引いて景氣變動の理論的研究は、勿論各著者により種々異なる見解に立つとはいへ、極めて盛なるが、其の取扱ふ所は商工業現象にして、農業の如きは一般景氣變動、恐慌を説明する補助手段として引用するに過ぎない。思ふに斯る事情は、農業資本主義發達が比較的遅かりしと、農業經濟が國々により極めて多くの特異性を有するため、農業恐慌に就ても、之を一般的に把握することの極めて困難なるに基くものであらう。

従來の農業經濟學者は農業恐慌を如何に規定するか。コンラードは「農業恐慌とは異常なる純収益、殊に地價の騰貴に對する反動として起る純収益の低下並に信用の不足に依て、大多數の農

民の經濟的存在を脅す所の一國の經濟狀態」であると解し、<sup>1)</sup> シュレルン・シュラッテンホーフエンは、「農業恐慌とは農政生活に於て激しく現はるゝ疾病狀態にして、最初は農業制度及び經營に多かれ少なかれ急激なる惡化を惹起し、之が治癒には長時期を要し、また慢性狀態に移し、一般狀態の永續的變革を惹起するものである」と定義してゐる。斯くの如く解するときにはペロウの云ふ如く、<sup>2)</sup> 凶作、戰爭等より起る古代及び中世の農民困窮をも此の内に入るべきこととなる。アメリカに於ては農業恐慌を表示するに農業不況 (Agricultural depression) の語を以てするが、明確なる概念を規定してゐない。ゼーリングは多少其の概念を限定し、「農業恐慌とは多數の農民をして損失によつて農場を失はしめ、又多くの農村を荒廢に歸せしむべく脅す所の農家收入の損失狀態を惹起する價格構成狀態である」と解してゐる。<sup>3)</sup> 此等の諸定義に接するとき、農業恐慌の正確なる定義の缺如せるを看取すると同時に、各著者が此の概念中に織込める經濟的、社會的、歴史的內容の極めて多様なることをも看取し得るのである。思ふに農業恐慌の發生は、價格構成が農家經濟に對して決定的影響を與ふるに至れる資本主義經濟時代に於て、始めて現るゝものであり、詳言すれば價格構成中に於て、農家困窮の決定的原因を認め得る場合に限るものである。<sup>4)</sup> 資本主義的生產恐慌の特徴は、市場價格が平均生産費以下に甚だしく低下することであり、此の事は農業恐慌に於ても亦瞭に妥當する。故に筆者は農業恐慌を以て、農産物價格が生産費以下に甚だしく低下し、爲めに農家經濟の困窮没落を惹起する現象と解せんとする。

## 二、農業恐慌形態

- 1) Conrad, "Agrarkrisis" im Handwörterbuch der Staatswissenschaften. 1909.
- 2) Schullern-Schrattenhofen, Agrarpolitik. 1924. S. 155.
- 3) Below, "Agrargeschichte" im Handwörterbuch der Staatswissenschaften. 4. Aufl. 1923.
- 4) Sering, Agrarkrisen und Agrarzölle. 1925. S. 7.
- 5) v. Dietze, Die gegenwärtige Agrarkrisis. 1930. S. 2.

各國の史的發展中に於て、農民の困窮は無數に存した。農業恐慌とは農民が交換經濟に緊密に織込まれ、農產物價格暴落によつて生活安定を脅かさるゝ現象に限る。農業恐慌の意義を斯く解することは、此の交換經濟の下に於ける農民の困窮は、それ以前の時代に比してより頻繁に起りより、苦痛となれるものなることを意味するものではない。又かゝる意義の農業恐慌をその儘の姿に於て描寫することは決して容易なる業ではない。蓋し農業恐慌は一般に他の社會現象と混淆し、經濟生活内に於ける外部的攪亂は農業をも一樣に襲ふからであり、幾多の轉變は農業に殊に激しく感ぜらるゝからである。即ち一般物價の低落は農民に對して一層苦痛を與ふるものである。それは自然に拘束さるゝ農業にとりては變化せる情況に適應することは困難たるからである。

凡そ恐慌たるや資本主義經濟に於ける生産發展に基いて必然的に發生する週期的現象である。各派經濟學は夫々異なる見地より、此の現象を矛盾なく解決せんと努力し、最近に於ける傾向としては、從來の靜的考察を不可なりとなし、經濟關係の變化、順環的發展をそれ自から生成發展して行く總體として把握し、從て恐慌をも經濟的發展に於ける週期的變動の一聯鎖として之を解せんとする景氣變動理論の出現を見るに至つた。ともあれ恐慌が資本主義的生産恐慌として現るゝ限り、其の特徴は市場價格の平均生産費以下への暴落に現れ、此の暴落は生産力の異常なる發展と一般購買力減少との間の矛盾に基くものであつて、此の矛盾が恐慌の發生に導くものであり所謂沈滯、上昇、高景氣、生産過剩、恐慌、沈滯等の循環運動を繰返すものである。農業恐慌は一般恐慌を把握すると同一の方法に依て、之を解明し得るであらうか。農業は國々

6) v. Dietze. a. a. O. S. 4.

7) A. Löwe, Wie ist Konjunkturtheorie überhaupt möglich (Weltwirtschaftliches Archiv. Bd. 24. Heft. 2. 1926. S. 165.)

の環境により著しく異なり、假令如何に高度に發達せる資本主義國に於ても、尙且つ多くの非資本主義的要素を多分に包含する。從て資本主義的農業中に織込まれたる非資本主義的諸要素、資本主義的農業が經營さるゝ非資本主義的環境を無視するならば、何等の農業恐慌理論をも樹立し得ざるものであつて、一般恐慌理論は之を農業に適用する場合、多くの修正を必要とするものであり、抽象的研究より具體的研究に進まなければならぬものである。然し斯く解することは必然的に一般恐慌理論の農業への妥當性を否認するものではない。農業が各國の經濟的發達階段に應じて示す所の諸態様より、農業が商工業に比して有する技術的、經濟的、社會的、歴史的特殊性を顧慮しつゝ農業恐慌が現出する個別的特性と形態とを討究せなければならぬ。

一般恐慌は週期的景氣變動の一連鎖として、比較的急激に現はれ、多くは Panic の形態をとり比較的規則正しき週期をなして循環するを常とする。然るに農業恐慌に在ては、潜行的、慢性的状態として現はるゝを常とする。此の點よりすればストラコツシユの云ふ如く、之を農業不況と呼ぶを寧ろ適當とするであらう。農業恐慌の週期性に至りては、何人も之を理論的に説明したるものなく、スペクテイター、コンドラチエフの如き農業恐慌を一般恐慌の反映現象と解することにより、<sup>10)</sup> 兩恐慌の週期性を同一視するも實情に甚だしく背馳するを如何ともし難い。スツデンスキイは農業恐慌を以て、常に機械による生産力の發展に歸するも、此の技術的變化の波動を以てコンドラチエフの所謂長き週期を有つ循環運行の意味に解せず、從て毫も規則的に繰返さるゝことなき發展行程中の現象と解するが故に、從て農業恐慌の週期性を肯定するものではない。<sup>11)</sup>

8) Liaschtschenko, Zur Theorie der kapitalistischen Krisen in der Landwirtschaft. (Agrar Probleme Bd. 1. H. 1. S. 9.)

9) Strakosch, Wesen und Bekämpfung der internationalen Agrarkrise (Berichte über Landwirtschaft. Bd. 13. H. 3. 1930. S. 393.)

10) Liaschtschenko, a. a. O. S. 23.

然らば何故に農業恐慌は斯る特殊性を示すものであるか、我々は農業それ自體の本質中に之を求めなければならぬ。

(一) 農産物に對する需要は一般に弾力性に乏しい。最も重要な生活資料就中パンに對する需要は、最も確定的のものであり、恐慌時に於ても左程減少せず、さりとて好景氣時代に於ても左程増加せない。反之高價なる食料品又は加工原料品は景氣變動の影響を蒙ることが多い。

(二) 農業に於ては固定支出、即ち生産量に關係なく要する支出たる、地代、機械の修繕費及び償却費、飼糧、租稅等が工業に於けるよりも遙に大である。従て農産物の安價なる場合に於ても生産制限を行ふ利益少なく、従て農業者は工業者の如く價格下落に應じ直ちに生産制限を行はない。現今の土地私有制度の下に於ては、農業資本の大部分は土地購入に當てられ、又農舎の建築費等に充てられる。而して後者は生産目的にも生活目的にも使用される。従て一時の不況によつて放棄することなく、従て又景氣に對しても極めて鈍感である。

(三) 生産に於ける經濟的時の遅れ (economic lag)、即ち生産の開始から收穫物が販賣さるゝ迄の時の長さが、工業に比してより大である。<sup>12)</sup> 此の事情は市場の景況に應じて生産を伸縮せしむることを妨げる。

(四) 農業は多數の小規模生産單位から成立する。而して運輸、加工、仲間商人によつて、終極消費者から隔離される。従て協力して生産制限を行ひ、市場に於て支配力を揮ふことが不可能である。

- 11) Studensky, Agricultural depression and the technical revolution in farming (Journal of farm economics, V. XII. No. 4. 1930. p. 569.)
- 12) Whetham は農産物の各種支出項目が投下されてより、その生産物の販賣迄に經る平均月數に、それが總生産費用中に占むる割合を加重することによりウエートされた生産費目の economic lag を、大麥、牛乳、其他の各種經營について計算してゐる。

(五) 農産物産出の非弾力性は、労働供給の性質によつても促進される。小農に於ける労働力の大部分は家族労働であるから、農産物の価格が下落した場合に於ても、労働を短縮することによつて生産制限を行はない。寧ろ労働投下を増すことに依て生産量を増し、価格下落による損失を補はんと努める。<sup>13)</sup>

右に述べたる諸理由により、農業生産は工業生産の如く、急激に生産の伸縮を行ひ得ず、従て農業恐慌は不況の形態をとり、緩慢なる進行を續くるものであり、その週期性も一般恐慌の如く明白に現れない。これ農業に於ける技術的性質上、資本の再生産循環が工業に於けるとは、全く異なることと、農業に於ては生産資本(役畜、肥料、種子)の一部を自給することとも、其の理由の一たるであらう。併し斯く解することは一般恐慌と農業恐慌との聯關を否認するものではない。抑も農業と工業とは市場を通じて、次の四様の關係に於て相交渉する。即ち農業側よりは(一)生産手段として工業品を需要し、(二)消費目的のため工業品を需要する。工業側よりは(一)原料として農産物を需要し、(二)生活資料として農産物を需要する。一般景氣上昇の場合に於ては、農業原料品に對する需要が増加され、従て其の價格騰貴を惹起する。工業原料品としての農産物は其の再生産行程中に於て迅速に回轉さるゝが故に、加工品の形態に於て最も敏活に一般の購買力によつて左右される。従て農業原料品の價格は一般的傾向として他の工業品たる生産財に比して、景氣上昇の場合には最も速に騰貴し、恐慌期に於ては最も迅速に下落する。農民は又生産手段として人造肥料及び機械を購入する。農業機械は比較的長期に亘つて使用さるゝが故に、農業繁榮時に購入

Whethan, The economic lag of agriculture. (The economic journal. V. XXXV. 1925 p. 537.)

13) Belshaw, The profit cycle in Agriculture (The Economic Journal. V. XXVI. March 1926. p. 29.)

Seligman, The economics of farm relief. 1929. p. 41.

したる機械の償却費は、農産物價格下落、從て收益低下の場合に於ては苦痛を與ふる。從て農業不況が長期に亘る場合に於ては、此等の生産要具に對する需要が減退する。併し一般工業の發達に伴ひ農業生産手段たる工業品の價格は、漸次下落する傾向を有するが故に、農業生産費用の増加に對しては、他の費用項目たる地代、勞賃、土地資本利子に比して左程重要ではない。食用農産物に對する需要には弾力性乏しきを普通とする、就中穀類に對する需要は然りである。之に比すれば高級食糧品に對する需要弾力性は比較的大であるから、園藝的農業經營は一般恐慌に對し最も敏感であり、苦痛を蒙ることも亦甚だしい。農民の側に於ける工業製品に對する需要は、農業恐慌に際して最も甚だしく減退し、從て一般恐慌を一層惡化せしめ、一般景氣上昇を妨げる。要するに右四關係を通じ農業恐慌と一般恐慌とは相關聯するものであるが、既述の農業の特質よりして、生産の伸縮が迅速に行はれざるにより、農産物と工業品との價格差 (Share) は、農業恐慌時に於て最も顯著に現はれ、農民の苦痛を一層甚だしからしめる。一般景氣變動中に於て農産物の價格と工業品價格との描く波動的運動の週期、兩者の價格差の問題こそ今後の農業問題を解決する鍵である。コンドラチエフは之を兩生産部門に於ける生産力の發達程度如何に歸するも、彼の謂ふ所の農工業生産力とは兩部門の國民所得を一般物價指數にて除し、更に夫々兩部門の總從業者數を以て除したるものなるが、<sup>14)</sup>かゝるものが具體的によく農工業生産力を表示し得るか否かが問題である。

更に農業生産の結果は天候によつて著しく左右される。收穫の豊凶が農業恐慌の根源をなすか

14) Kondratieff, Die Preisdynamik der industriellen und landwirtschaftlichen Waren (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. Bd. 60. H. 1. 1928. S. 24.)



又は之を一時的に悪化せしむるに過ぎないか。之に對する回答は、其國の主要農産物が世界的商品となれるか、又其の消費が一國のみに限らるゝものなるかに依て、異ならざるを得ない。前者の場合に於ては豊凶は世界的に相殺さるゝが故に、假令一時的恐慌を惹起するとしても、決して永續性を有するものにあらざれば、寧ろ之を偽恐慌(Pseudo-Krisen)<sup>15)</sup>と呼ぶを適當とするであらう。然るに後者の場合に於ては收穫の豊凶は、その價格に大なる影響を與へ、農業恐慌を惹起する可能性がある。併し此の場合に於ても植民地よりの低安なる農産物の移入、一般不況等の事情を背景として、一層農業恐慌を甚だしからしむるものであつて、單なる收穫の豊凶のみが必ずしも農業恐慌を惹起するものとは考へられない。之に關聯して一言すべきは、農産物の豊凶が一般景氣變動に及ぼす影響であるが、此の點についてはゼボンス、ムウア、ピグー<sup>16)</sup>の研究あるが、一國が工業國に移り、農業が全國民經濟に於て演ずる役目が少くなる程、收穫は一般景氣に影響する所が少くなる。アメリカに於ける最近の研究によれば、作物收穫高の循環期と銑鐵生産高循環期との間には從來信ぜられたるが如き密接なる關係なく、一八七〇—一九二三年に於ては、兩者の相關係數は〇・二〇であり、銑鐵の循環期を二ヶ年遅らしたる場合に於ては僅に〇・一八である。前世紀に於ける兩者の緊密なる關係は、農業發展のため新開地への鐵道敷設により銑鐵生産の増加を促したるためであり、且つ鐵道敷設が活氣を呈するには兩三年の豊作を必要としたるからである。然るに今世紀に入りてより鐵道敷設も略完成し、爲めに收穫高と銑鐵生産高との間には左程緊密なる關係を示さざるに至つた。<sup>17)</sup> 勿論今日と雖も農産物の循環は一般景氣循環を喚起す

15) Strakosch, a. a. O. S. 391.

16) Moore, Economic cycles: Their Law and Cause. 1914.  
Pigou, Industrial fluctuations. 1927.17) Timoschenko, The Role of agricultural fluctuations in the business cycle  
1930. p. 52.

る一要因なるも、ムウアの信ぜし如き全般的のものではない。

以上に亘て農業恐慌一般について論じた。之が各國に於ける出現は、夫々の農業發達の段階に應じ種々異なる形態を採るは勿論であり、各國に於ける農業恐慌は各國の特殊經濟事情を背景として發生するものなれば、一般抽象論より具體的研究に向はなければならぬ。上述せる意義の農業恐慌は之を世界的に見れば、第一はナポレオン戰爭後に起れるものであり、第二は一八七五—一九〇〇年(新開國よりの低安なる穀物輸出に基く歐洲の農業恐慌)の期間に起り、第三は世界戰後より引續き今日に及べるものである。<sup>18)</sup>今日の農業恐慌については、論者により各異なる方面より之を考察してゐる。之が何時終熄するかについては今日何人も之を豫斷するを得ず、世界的一般不況とも密接なる關係が存する。以下今日の世界農業恐慌について各論者の意見を述べ、之について少しく論及するであらう。各論者の見解は農産物の價格論の上から見るも大なる興味が感ぜられる。

### 三、世界農業恐慌に関する諸見解

今日の農業恐慌に関する見解は大體之を左の三種に分類することが出来る。但し各の見解が多少相共通なる點を含み居ることは之を認めざるを得ない。(一)農業恐慌の原因を農民の資本主義的精神の發展に歸する説、(二)農産物需要減退に歸する説、(三)農業機械の發達に基く農産物の過剰生産に歸する説である。以下順次此等の諸説について論及しやう。

18) 河西太郎氏、農業恐慌論、商學論叢第二號、一四頁以下。拙稿、世界的農業恐慌に関する二見解、經濟論第三十卷六號參照

(一) 農業恐慌の原因を農民の資本主義精神の發展に歸する説。この説を採るものはリッターである。彼の謂ふ所に據れば、世人は農業恐慌を以て、世界の金産額の變化と信用の縮少に基く貨幣價値の變動に歸し、或は農産物と工業品との産額比率の變化に歸し、或は世界の各部分に於ける購買力の推移に歸してゐる。併し乍ら斯る諸議論は、何故に今日の農業恐慌が斯の如く甚大なるものなるかを説明するを得ない。此の現象を根本的に究めんとするものは、農民の心的状態を必然的に研究せなければならぬ。かゝる恐慌といふが如き重大且つ困難なる問題は、從來の研究方法を以てしては解決するを得ない。今日に於ては革命を起しつゝある農民の精神的前提を顧慮せなければならぬ。過去幾十年かの農政的考察の重大なる過失は、此の農民の心的状態を充分に顧慮せなかつたことにあつた。世人は農民の心的状態に就て、又農家經濟の推移を決定する法則に就て如何に考ふるかを論せず、農民の心的状態は不變のものでなく、現今に於ては最も迅速なる變轉の道程を辿つてゐる。<sup>19)</sup> 此の農民の心的變化とは資本主義精神の浸透であり、最大利潤獲得への努力である。農史が吾々に示す諸變化の中で、衝動力としての資本主義精神に最大の重要性が附與される。吾人は世界の農業に起れる最も偉大なる革命化の證人である。<sup>20)</sup> 此の衝動力は農地を以て農業生産行程に於て從來に於けると異なる地位を採らしむるに至つた。即ち此の資本主義精神によつて農民は收穫遞減法則の作用を完全に停止せしめたのである。此の武器は農業資本であり、機械であり人造肥料である。斯くて農業生産の偉大なる増加、過剰生産の素地を作つた。リッターは之を實證するに左の統計を掲げてゐる。<sup>21)</sup>

19) Ritter, Die eigentlichen Ursachen der Weltwirtschaftskrise. (Agrar probleme Bd. 2. H. 3/4 S. 453.)

20) Ritter, Landwirtschaftliche Entwicklungstendenzen in der Welt. (Zeitschrift für die Gesamte Staatswissenschaft. Bd. 87. H. 2. 1929. S. 315.)

21) Ritter, Die eigentliche Ursache der Weltwirtschaftskrise. S. 457.

拙稿、世界の食糧問題、經濟論叢第三〇卷三號參照

世界の植物性食料品の全額  
(千ドツベル、ツェントナー單位)

	1909/13年 の平均	1923/27年 の平均	1909/13年の平 均産額を100と する1923/27年 平均産額の指數
小 麥	1,234,606	1,309,752	106
イ 麥	455,594	440,586	97
米	875,000	930,000	106
大 麥	447,256	409,300	92
燕 麥	659,888	659,303	100
玉 蜀 黍	1,088,732	1,157,933	106
馬 鈴 薯	1,492,907	1,763,125	118
甜 菜 糖	79,303	77,833	98
甘 蔗 糖	106,237	170,570	161
砂 糖(全額)	185,630	250,403	135
葡萄酒(千リ ツトル單位)	150,634	175,966	117
オ リ ー ツ 油	6,031	7,737	128
コ コ ア	2,349	5,000	213
茶	7,058	7,936	112
珈 煙	12,278	15,613	127
ホ ツ プ	13,877	18,103	130
菜 種	808	588	73
亞 麻 仁	26,021	25,525	98
棉 花 種	35,233	44,541	126
麻 花 種	98,184	109,308	111
麻 種	5,461	6,638	122
世 界 人 口	175百萬	187百萬	107

穀物の生産額だけが世界人口の増加に比して遅れてゐる。たがそれに拘らず穀物殊に小麥價格の暴落は、今日の世界農業恐慌を惹起してゐる。此の矛盾は如何に解決さるか。リツターは文化國の國民營養が、穀物から蔬菜、肉類へと移り、穀物需要量が減少した。従て小麥は尙ほ相對的に過剰であると主張する。

右のリツターの主張に對して批難すべきは、世界人口の總體と農産物とを比較してゐる點である。之は論據の正當を缺くものであつて、寧ろ商品化さるゝ穀物が消費さるゝ諸國の人口のみを

考慮に置くべきであらう。未開國の人口をも加へることは何等の意義を持たず、寧ろ事實を昏迷に陥れる。次にリッターは農業の一般資本主義化、營利化に就て云爲するが、農業經營の如何なる部門―大經營か小經營か―が先づ營利化するか、而して其の結果機械化其他により、收穫遞減法則を緩和するか。それらの農業經營の内部構造には一言も觸れてゐない。ために論證に於て甚だ不徹底なる憾がある。

(二)農産物の需要減退に歸する説。農業恐慌の原因を需要減退に求むる論者の中にも、或論者は農産物需要の絶對的減少に歸し、又或る論者は農産物の種類に應じて生ずる需要度の變化に歸するものである。ゼーリングは最初農業恐慌の原因を歐洲に於ける農産物の需要減退に歸し、その原因を失業者の繼續的增加、資本金子の騰貴、租稅負擔の増加、外債負擔によるものとなした。<sup>22)</sup> デイチエも農業恐慌は内部的原因(indogene)と外部的原因(exogene)によつて發生するものとなし、後者として世界戦争による購買力の減退を擧げゼーリングの説に賛同してゐる。<sup>23)</sup> ゼーリングは其の後自説を多少修正し、農業技術の進歩をも一原因として認め、<sup>24)</sup> 最近に於ては一九二五年以後に於ける穀物價格の下落を以て、南北アメリカ地方の過剰生産に歸し、畜産市場に於ける價格下落を以て、尙ほ中部歐洲の購買力減退に歸してゐる。<sup>25)</sup>

次に農産物の種類による需要の推移に歸する説とは、生活標準の上昇に伴ふて、穀物の需要が減じ、他の畜産品、蔬菜等の高價なる食料品の需要が増加することによつて、穀物生産が相對的に過剰となりて、農業恐慌を惹起するものと主張するものである。

- 22) Sering, Internationale Preisbewegung und Lage der Landwirtschaft in den ausser-tropischen Länder. 1929. S. 109.  
23) Dietze, a. a. O. S. 34.  
24) Sering, Entwicklungslinien der landwirtschaftlichen Weltproduktion (Weltwirtschaftliches Archiv. Bd. 32. Heft 1. 1930. S. 231.) Sering, Internationale Agrarkrisis (Weltwirtschaft XVII Jahrg. H. 1. 1930. S. 5.)

クルタンとフロモンとは、稍趣を代へて大體次の如く論ずる。今日の農業恐慌は農産物の價格下落、殊に工業品の價格に比して相對的に低下してゐるといふ事實に現れてゐる。然らば農産物價格が工業品價格に比して、遙に下落せるは何に基くものであるか。之は農産物の總産額が工業品の總産額に比して、相對的に大であり、從て農産物價格が相對的により、多く低落せるものと考ふることが出来るか。兩氏は之を否認するためアメリカ其他の諸國の生産統計を掲げ、農畜生産量指數が工業生産量指數よりも遙に低きを示してゐる。然るに諸國の統計の示す所によれば、農産物價格指數は工業品價格指數の遙に下位にある。然らば農産物價格と工業品價格との間に價格差の生ずるのは何によつて説明されるか。此の説明は農産物と工業品とに對する需要方面よりなされなければならぬと云つてゐる。即ち工業品は、勿論生産財と生活用品とによつて差異あるも、需要の弾力性強く、國民所得の増加に伴ひ工業品に對する需要は無限に増加する可能性がある、然るに農産物に對する需要には斯る弾力性が乏しい。食物に對する需要は各人により、又風土によりて夫々異なるも、一般に胃腸の攝取力によつて限定される。從て農産物に對する各人の需要は狭く限定されたる範圍内に於て變動するに止まるものである。故に農産物に對する社會の總需要は、需要者數の増減によつてのみ生ずるものであり、人口の變化が農産物の需要を變化せしむる唯一の要素である。だから農産物の生産量が工業の夫に比して少いの拘らず、農産物價格が工業品價格よりも遙に低位にあるのは、農産物は人口の増加よりも迅速に増加せざる需要を充すからであり、工業品は人口増加以外の原因、例へば各人の收入増加に應じて増加する需要を

25) Freund, Die zweite Internationale Agrarkonferenz in Cornell University (Weltwirtschaftliches Archiv. Bd. 33. H. I 1931. S. 309.)

充すからであるとなし、農産物價格下落從て農業恐慌の原因を徹底的に需要側に求めてゐる。又農産物中に在ても、穀物生産額は他の高價なる食料品の生産量に比してより、少ないのに拘らず、前者の價格が一層低下を示してゐる。彼等は之を以て、生活標準の上昇によつて、高價なる食料品に對する需要が相對的に高まつたことに歸してゐる。<sup>26)</sup>

右によつて明なるが如く穀物價格の下落は、生活標準の上昇に伴ふ需要減退に歸せらるゝ場合が多い。各國の一人當りの穀物消費量の増減傾向は國々によつて異つてゐる。之を示せば左の如くである。<sup>27)</sup> (ドツベル、ツェントナー單位)

	一九〇九—一三年	一九二二—二七年
歐洲西部	二・三〇	二・〇〇
北米合衆國	一・八八	一・六五
濠洲	二・四五	二・一二
東南部歐洲	一・八二	一・九三
アルゼンチン	一・九〇	二・〇四

穀物消費量の増減は、世界的に見て多少相殺さるゝ。從て此の需要の減退のみを以て、穀物の價格暴落を説明するは穩當を缺くやうに思はれる。又穀物消費量減少を以て直ちに、民衆の福祉増進に歸するも多少早計たるを免れない。何となれば戰前に於て歐洲の穀物主要輸入國の福祉が今日よりも一層上昇傾向にあつた一九〇五—〇八年より一九〇九—一三年の期間内に一人當りの小

26) Courtin et Fromont, Essai sur la crise agricole. Production et population (Revue d'économie politique 44<sup>e</sup> Anne. N<sup>o</sup> 4. p. 1085 以下)

27) Dietze. a. a. O. s. 33.

\* 英吉利、獨逸、佛蘭西、白耳義、和蘭、瑞典、諾威、丁抹、西班牙、伊太利を示す

麥消費量は一五六・五キロ、グラムより一五七・四キロ、グラムに増加し、ライ麥消費量は六七・五キロ、グラムから六九・二キロ、グラムに増加してゐるからである。<sup>28)</sup> 尙ほ此等の點を確實ならしむるためには、將來の統計的資料蒐集に俟たねばならぬ。尙ほ一般不況、失業等による需要減退は或る程度に之を認めざるを得ないであらう。

(三) 農業機關の發達に基く農産物の過剰生産に歸する説。最初諸學者は今日の農業恐慌の原因を農産物の需要減退に求めたるが、漸次農業技術の進歩に之を求むるに至つた。今日に於てはゼーリング、デーイチエ、スコラコツシユ、ジャスニイ、ナース、<sup>29)</sup> スツデンスキイ等、程度の差こそあれ、皆之を認めてゐる。一八二八年の秋以來穀價の下落傾向が著しく、一九二八年より一九三〇年の夏迄に小麥は三〇%、大麥は二八%、ライ麥は五六%の暴落をみた。ゼーリングは<sup>30)</sup> 最初之を以て一九二八年の世界的豊作に歸したが、翌年の早魃で世界的收穫が多少減少せるに拘らず、穀物、殊に小麥價格は今日に至る迄下落一方の途を辿つてゐる。此の事情の研究の結果、一九二八年の恵れたる天候は既に久しき以前より、アメリカ、カナダ、アルゼンチン、濠洲に於て使用されつゝあつた技術的改良を一層促進せしめたる事を知るに至つた。小麥品種の改良に依て乾燥地帯にも穀作を擴張するを可能ならしめ、トラクター、コンバインの使用は此の勢を一層促進せしめた。スツデンスキイ及びヂャスニイは農業恐慌の要因としての農業機械を重大視する。馬匹を使用して耕耘をなすときは、一エーカーにつき二乃至四弗を要するに、トラクターによるときは僅に一・五弗を以て足るに至つた。又コンバイン使用によるときは小麥一ブツシエルの收穫費用は普

28) Dietze, a. a. O. s. 33.

29) Freund, a. a. O. S. 309.

30) Jasny, Die neuzeitliche Umstellung der überseeischen Getreideproduktion und ihr Einfluss auf den Weltmarkt. (Vierteljahrshefte z. Konjunkturforschung Sonderheft 16. 1930)

32) Sering, a. a. O. S. 231.



通從來の收穫方法に比して一五乃至二〇%の節約を齎すに至つた。<sup>33)</sup>又此等の機械使用により耕作用としての馬匹を駆逐し、よつて飼糧としての穀物需要を大に減退せしめてゐる。斯る機械使用は必然的に作付面積の擴張を促した。即ち合衆國、アルゼンチン、カナダ、濠洲の小麥作付總面積は、一九二一年―二五年の平均を一〇〇とすれば、一九二六年には一〇二・九、一九二七年には一〇五・二、一九二八年には一〇九・二、一九二九年には一一二・〇四に増加してゐる。<sup>34)</sup>ために小麥の過剰生産に導き、小麥の年々の世界保有量は(毎年十二月一日に於ける)一九二五年より一九二九年に至る迄に、夫々二五七、三〇〇、三四七、四七六、五五〇(百万ブッシェル單位)に上つてゐる。<sup>35)</sup>かゝる機械使用は各種農業經營に一樣に採用されたのではない。最小のトラクターでさへも之を有利に使用する爲めには、少くとも二四〇―四〇〇エーカーの農地を必要とする。然るに合衆國農場の平均面積は一四八エーカーであり、カナダの夫は一九八・〇エーカーである。合衆國に於ては全トラクターの八二%は一七五エーカー以上の農場に集中されてゐる。而して一七五エーカー以上の農場は全農場の一八%(耕地面積から云へば全耕地の約三分の二を占む)を占むるに過ぎない。従て一七五エーカー以下の農場(全農場數の八二%を占むる)は、全トラクターの一八%を使用してゐるに過ぎない。コンバインに至つては、之が有効に使用さるゝには、四八〇乃至一〇四〇エーカーの農場を必要とするが故に、機械を使用し得ざる小農は不利を蒙らざるを得ない。スツテンスキイは謂ふ、<sup>36)</sup>「一經濟學者は農業は單なる營業でなく、生活の手段であり、生活様式であるとなす。然し此の農耕の安易的性質は、アメリカ農業に有利に従事してゐるものゝ割合

33) Studensky ibid. p. 553.

34) Sering, Internationale Agrarkrisis. S. 6.

35) Strakosch, a. a. O. S. 396.

36) Studensky, ibid. p. 566.

37) Seligman, ibid. p. 93.

(總人口に對する)が一八二〇年の八三・一%から一九二〇年の二六・三%に減少する不可抗的な行程を阻止せなかつた。…殆んど總ての小農が彼等の農耕の引合はざるを見出すまでに、長き時日を要しないであらう」と。技術的進歩が農業生産過剰、從て農業恐慌を惹起せる主要原因たることは之を認めざるを得ないが、一般不況に基く購買力減退も亦その原因として看過し得ないであらう。小農は農業恐慌によつて必然的に没落する運命にあるであらうか。デイーチエはいふ、<sup>38)</sup>「五十年前以前の穀物收穫の増加は、家産所有農民の處女地開拓によつて行はれた。今日のそれは機械をよりよく利用し得る大經營(一千モルゲン以上)によつてである。…此の新形態の農業經營に於ては家族經營は問題ではない。而し此等の家族經營に於ても、營利的打算が全然徹底的である」。此の小農の營利心こそ農業恐慌中に於て、彼等をして自らを救ふ途を見出さしむるものではないからうか。

#### 四、結 言

以上に亘て農業恐慌一般に就て論じ、今日の世界農業恐慌に關する諸説に就て論及した。今日の農業恐慌は主として機械化による過剰生産と民衆購買力減少より生ずる農産物の需要減少とに基くことは何人も之を否認し得ないであらう。後者は一般世界的不況に緊密に關聯する。此の農業恐慌進行中に於て、農産物の下落が農民に特に打撃を與ふるのは、勞賃、運送及び販賣費用、租税、地代、農民が購入する工業用品が、農産物の價格に比して遙に緩慢なる下落の行程を採る

からであり、兩者の間に價格差を生ずるからである。斯る事情の下に於ても、技術的進歩を利用し得る大經營と然らざる小經營とによりて、受くる影響を異にしてゐる。蓋し前者は農業機械化により農産物價格の下落の下にあつても、生産費の低下によりて生産擴張をなし得るからである。併し小農は一部論者の考ふる如く、必然的に没落すべき運命にあるであらうか。アメリカに於けるが如き營利化されたる家族經營は、恐慌そのもの、中に於て何等かの對策を見出すであらう。即ち彼等も亦機械使用を可能ならしむる共同經營の形式に向つて、徐々に進むものではなからうか。

今日の農業恐慌の及ぼす影響は、大經營と小經營とによつて異なると同様に、地理的にも亦異なる。即ちアメリカ内部に於ても東部平原地方と西部集約農業地方とに於て、更にアメリカ、カナダ、アルゼンチン及び濠洲と歐洲との間に於て、世界農業恐慌は何時終りを告ぐるであらうか。こは一般世界不況の進展如何によつても大いに左右される。農業自體の點より考ふれば先づアメリカ其他の新開國に於て、農業恐慌が生産制限(勿論徐々ではあるが)によつて漸次緩和さるゝであらうが、歐洲農業は尙ほ長く價格下落の下に苦しむことであらう。蓋し兩者の間に於ける生産費の懸隔は餘りに甚だしいからである。今一例としてフランスとアメリカ其他の諸國に於ける「エーカー」當りの小麥生産費を示せば次の如くである。<sup>39)</sup>

	一九二一年	一九二四年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年
フランス						
大經營	三九・三五	四八・六八	五二・〇一	三八・〇二	四四・九九	四七・七一
小經營	四七・二二	五八・四二	六〇・四八	四五・六三	五三・九八	五七・二六
北米合衆國	二一・〇二	二一・八八	二二・四一	二一・三八	二一・三〇	二一・〇一

39) Levin, Agrarkrise in Frankreich. (Agrarprobleme Bd. 2. Heft. 3/4. S. 538.)  
Vgl. Jasny, Die Konkurrenzfähigkeit der wichtigsten Überländer auf dem Weizenweltmarkt (Berichte über Landwirtschaft. Ed. IX. Heft 1/2) S. 1

カ	ナ	ダ	二〇・五七	一	一	一
アルゼンチン			一五・一六	一	一	一
濠洲			一三・四二	一三・二六	一五・九四	一六・四九

前世紀の農業恐慌は一八七五年より一九〇〇年迄続いた。併しアメリカ其他の新開地が少くなり、生産費が増加するにつれて、歐洲農業恐慌は自から終息を告げた。今日の農業恐慌も大經營が機械化によつて、穀價の下落に拘らず、生産費低下によつて生産を續くること可能なる限り、穀價の上昇は容易に之を期待し得ないであらう。従て農業恐慌は尙ほ慢性状態を續くるであらう。又かゝる農業生産力の發展にスツデンスキイの云ふ如き、何等かの波動的性質があるか否かの問題に就ては、容易に之を解決し難き所がある。